



里見八犬傳 第六編 卷四十



13
709
91



明遠 13
 第 709
 卷 91



明治 三六年
 十月九日
 購求

南總里見八犬傳第九輯卷之四下

東都 曲亭主人編次

第百十六回 衆俠を以孝嗣源公子と援く
 西使と果てて仁景春と敗走す

此程小寄隊の西夜安に閑る敵の為小駭されて睡りもなせむありけし。夜
 真夜半過る時候より。岡の陳營静し。戰鼓の音もせむ。箭火の光も細く
 多し。原來二犬士の落後れて。又翌の夜も俟む。人と思はる者もなけれ。或は
 盾と布に或は服の屑と持せ。打盹る者もかりける。既而。天の明る。とある時
 候敵陣猛可起り立て。金鼓間も天地も動も。可の喊聲と共。箭前と射出。鐵
 砲と發被て。二面一度攻下る。其威勢殆ど似。刺最大。野豬幾十頭。扶
 牙。其焦火を結着る。真先。找め。二面齊一寄隊の陣へ放入る。其野豬ハ

八犬傳九輯卷四下
 大正三年

殊小猛くて寄隊の勢と憚らぬ敵の先陣不備なる戦車の下へ入り突つ
前へ走りあつてもあり然る車と跳躍し人馬を擇び駈け付せる焦火散
乱して蝸く戦車不燃移ると里見の士卒の隊より信乃が準備の礮硝小石を
交へる囊の中よりあつて推乃其火は落し擲られ火勢立地の激發を
車上の武者も車下の人馬も焼れて免る者幾稀人將是を加ふる且明の風
吹出ると軒遇突智の目茶涯りるけれど寄隊二回の大將の頭定成氏憲房は
其隊長重勝在村素行們錐布五六鷹裂八九頭人若兵近習まを心腹いふ
とたろり不敵戦の擬勢を乱れて謀ぐ士卒と俱火を避け煙を巻れどと或る
敵軍は馬を鞭ち或は強断するやと執り或は一條を鎗雨二人多と撰て相争ふ
相擇を升が正回より大塚信乃並小真間井樅二郎左右の則犬飼現八継橋
綿四郎杉倉武者助田税力助以下の勇士等二回一度隊兵を伐め煙の際

よの攻入々々中る不儘せし敵も小野野猪も亦自家を幫助て慌て叫ぶ敵の
雑兵を牙引掛け擲り勢ひ人畜進退合期して出沒不測の開が上寄隊の
都て風下在り敵は逐れ烟を噴びる面を向は由るされ將帥士卒の差別を
咸直類れ敗走ると二天士並直元逸友秋季も香高深も二面一致の輝速を
く猶脱すと迂る程霜霜氷る夜の長りも朝風寒く明の日の十二月八日
や肩谷定正の水路を安房へ推渡りて稲村の城を屠んと豫契り日本日
あるれあも寄隊四萬のその中然しも恥と知り名を惜む勇士もあつた山
内の隊の遊軍の頭人絶内外進惟定と喚做る者其副の頭人建柴
浦之介弘望と只二騎馬を乗駐り西聲高く喚るや建柴自家の逃歩哉
見の寡の知れる敵の為火攻せられと逃る那里へ移るや志ある者
我の續げと辱め嗜り馬の上鎧を打振々惟定の信乃が隊あらし向弘

望の現八を控まき俱血戦を然其隊相従雄兵僅二三百名主と助
助死を見えらむ一霎時の挑戦あつて二天士の先鋒の頭人真間并秋幸
橋高深俱中兵と用以て中も崩れ捕蓋て息も難れ攻に惟定弘望の
太刀折れ勢以究りて俱陣歿して名を送其隊の兵も多く歿れて命を免
るの稀に有り程山内頭定の逃る士卒も推立られ憶に遠く延る
けるが這光景を見えらむと他歿まきと吸り馬を返して駈向に隊長白石重
勝も連り士卒も馬糞して其里より返り合も勢以始り似され猶二三
萬の士卒あり然成氏も憲房も且羞且稍是ふ氣を以て俱備と建雨平
信二面齊一返り來ぬと信乃らち見て毫も謀を隨即人を走らせ現八を
直元們の示まき現窮寇の逐ふべし寄隊の返り合せて兩度も敗軍の
恥と雪め多く欲するらん遮其他既其戰車を燐れて今脚を鮮果似

たり又何支をうせせ各切所引受其疲勞るを歿せんと以急謀その
利あるも現八も亦直元逸友も陣俱退せ或水田と前あつ或の
樹柵より地方の備と建る程あむせ寄隊の三將隊長頭人三隊の
別れて其直元返り攻破らむ競人も樹柵水田を遮りて人馬の進退自
由るに前戦の時を移ま白石重勝焦燥る士卒も下知して巨盾を幾
ともる深田の水へ投布々々人馬を涉して短兵急に拵り競へども二天士並ふ
直元們的樹柵の間敵と往々左右に攻め破られ一進一退其機稱ふ
士卒の宛る脚の像く出沒不測の術と盡せ寄隊の歿る者も多し
ども大勢をとり又立替り入乱れ時移るまで戦ひけり話分兩頭あ朝
困府臺の城を昨夜田稅逸友が義通君の見參の折大塚信乃の意哀と
傳へる明日の闘戦の進退を固様々々といふ違ひなき明や夜比りい岡

大塚傳山并藤田

三 武家堂藏

山の方小兵火起りて箭前叫び喊の聲ききも蠅々とて字をえり義通君を東辰相と近習五六名とおく自親城樓の升り是を見て原來田税力助が亦あてく信乃が火猪の計りまて敵の戦車を燻くやわらむ卒然とわ我も亦疾出陣して岡山旗を建軍威を資ん高間の山の雲をぬふあり見てのまじとてく遽く城樓を下立へ東辰相隊よりあの意どりて出陣の準備あり士卒咸戎衣を穿戦飯さへ使ひ果る主將の出ると待程されど聊も時を殺さば只老兵の之城を守りて其餘は這出陣に従ざる者るく鼠河の這方の岸小維置ける舫幾十艘少うち乗りと岡の下を渡しける徳而義通の東六郎辰相と先立立して岡山の陣営に至りぬ程小淵訖鳥古内振照俱教二の隊の士卒とわく出迎へて幔幕引匝しる儲の発見小就まりり今曉二天士と直元逸友等が勝軍の事の趣且野猪の奇異大功猶且寄隊の逃

るど軒をく葛西の方ふ赴けける自家の進退箇様々々と迭代お安上まの義通勢は入るる辰相も是をうち守る後の安危と知ん為又蚊々候と遣せし約莫半响許めて其斥候かゝる寄隊の假名町の這方中ひと返あ合せん今徳々の地方あり閉戦の最中勝敗も安定るれど寄隊大執るるどゆく自家危く見をひひと告る小義通堪馬たて去らんぬ這陣営小安坐あて居るをぬあるを疾其地方へ馳着て信乃們を援けて雌雄と決せいでとひはくも既に立ちまゝぬふを辰相と急小推禁めり現御幼年実有る御勇武は傑出ると感心の外ひらきも萬々金も易く死貴介公子の御身とゆへ危あしと知食るる今大敵に向せぬる物体をひらきや窮寇の追ふべくと兵書小本文ありし大士等が知る所なれども只其勝つ乗る勢ゆへ竟小件の行心あり大士も右の如し況大士るる取者ともよく思ひあるるま且國府臺の城郭ハ

是當郡の根本也。這岡山咽吭入然ると今この岡を棄て敵に向き勝るといふ。寄隊必おの圖に据りて我咽吭と扼ん然ると此の臺の城も守り死んば主人は自定を思へ危くとも最始くそむべれ君の所御座さ大士們が退口ありて必後易多べ臣等二千の雄兵を領し駭向ひ敵の中りて信乃現八門ふ力を勦えよの議に任させぬか。と詞を聲して諫ると義通頭を掉りて否と我弱冠の身と見くろて今只漫不賢とぞ。老老の諫と拒むわねど大江親兵衛比る。年二の兄をれがそこの地の主將を命せられ。開戦兩度不及までいそ敵の旗と見む自家の聞戦危れを少知りて出だもあつ異日何を面目やと館の見参不入と縦敷とも敷もつとも大士と安危を俱せぬの意をのへ饒ねと喞言がましくち勸解と。搗尻あつ怖るる辰相竟諫難と。あらん其是非及はぶ。衆皆御伴仕らんと心と更陣狗も。従ふ士卒四千餘名酒就鳥古内

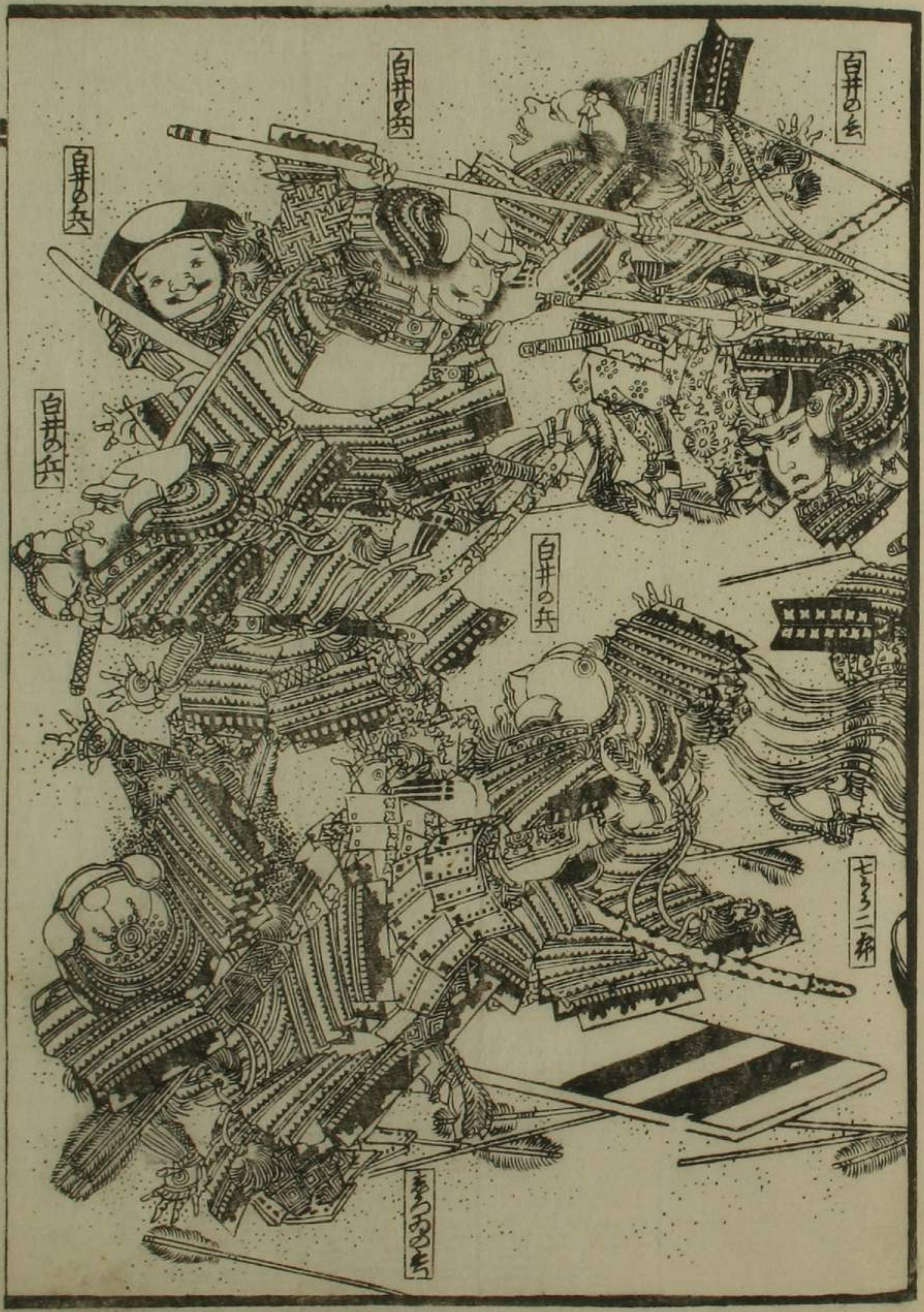
振照俱教二と先鋒の頭人として辰相則後陣と義通の騎馬の前後左右の事執り老兵近習と毎皆華麗の探甲と。姓名寫を本道あつ。翻た白旗三四流寒け風吹靡せ氷威を器械の難と外して朝日赫炎。隊伍齊々整々と那戰場へそ程の七七八町や。端多く一隊の敵兵あり其勢約二四千有餘兩矢皆の花踊漂成る旗と扱めて這方へ來ぬ。撞見けり此は是別人る。上野園白井の城主長尾判官景春が今番の役の先鋒の頭人梶原後平二景澄と。嘔做者人介る。景春の嚮ふ扇谷定正の催促に従ふ。既不出陣の望まぬ。五十子へ赴く。猛可漏出せる如く。今この地不在る事の情由と什麼と後原る。他獨立の志あり。其の故不定正の軍兵催促に従ひ多く敢死多。那隊に附る。且其水路より安房へ攻入ま。この風聲と傳へて冷笑ふ。と言ふ。忠告を。肚裏か思ふ。扇谷の越智の將

昔より例もた海を渡して安房の稲村へ攻入るも欲するの時をも地理も思ひ
 かる是は後智の致を所凶多し吉少き山内の聊思慮あり俱水路
 より找まきし。國府臺と攻まきし。迂遠な似れども必是其利あり然りとて
 今ある那隊も從つ。縦戦功ありとも我の二の町二の町也。一步の地もゆるかほへし
 要とてあれと尋思とあり。白井の城を出し。胡意中途に掩留して敢五千子小
 來會せむ。且間諜見し。寄隊あり地。着陣の事の形勢を視知りし。景春
 則隊の兵を或る百名二百名。この地を遣。潛せて那身も既來着を。意を
 迹を埋め影と躲して猶も動靜を視。程ふ前日の閉戦。寄隊の戰車如意を
 して勝負區ありし。其後寄隊の二天士。龍り。岡山の陣營を圍。攻め
 既して。曉天。寄隊の戰車と敵を燒。總敗軍。及ぶ時。又那長尾の
 間諜見。走りかへて告。景春。滿面うち笑れて。今も。里見の犬士。必

敵の逃るを。趕。岡山の陣營。空虛。做。我。の。虚。不。限。入。り。又。蝮。頭。里。を。伐
 捕。り。國。府。臺。を。攻。入。頭。定。主。の。鼻。を。用。て。兵。權。立。地。我。を。入。り。し。て。猛
 狼。煙。を。颺。近。四。下。の。隱。在。せ。自。家。の。兵。を。集。る。梶。原。守。佐。美。直。江。樋。口
 ら。ど。咽。做。を。隊。長。各。其。從。兵。を。領。て。時。を。得。さ。む。聚。合。多。あ。け。れ。其。兵。二。千。七
 八。百。あ。り。け。り。景。春。是。を。二。隊。に。分。ち。梶。原。後。平。二。景。澄。と。先。鋒。の。頭。人。と。し。て
 樋。口。小。二。郎。維。龍。と。し。て。其。副。也。則。隊。兵。二。千。を。授。け。て。真。先。先。是。を。找。せ。り。
 却。景。春。の。後。陣。を。守。佐。美。直。江。們。以。下。の。勇。士。と。雄。兵。二。千。八。百。有。餘。を。從。へ。り。
 河。原。の。岡。山。と。投。て。推。本。の。程。不。料。も。今。這。里。を。里。見。義。通。の。信。乃。現。八。百。有。餘。
 カ。と。勦。せん。と。亦。岡。山。より。出。陣。を。連。り。不。士。卒。を。い。か。ま。る。其。一。軍。の。逢。る。間。話
 休。題。却。說。里。見。長。尾。の。兩。敵。の。迭。ふ。其。旗。挑。め。夙。も。猜。し。て。叙。次。と。し。て
 思。ふ。の。り。毫。も。礙。議。せ。ぬ。近。づ。隨。鎧。砲。を。發。ち。被。け。發。ち。り。れ。て。姑。且。桃



よしまら せんあや
 義通善射
 勅敵を斃す



む程ふほどとあれ長尾の先陣梶原樋口の俱あそばさの士卒と罵ののし励まして殺ころ顔かほさんと競まへども
里見さとみの先鋒せんぽうの頭人あたまる潤うる鷲じゆ振照あきらと相あひま拮まつ勇士ゆうし猛卒まうそつ死力しりきと盡つくき動うごき
勝かち不ふ乗のりる勢いきほひ優まさりて見みえおけり有あり徳とく一ひと程ほど景春けいしゆんの後陣ごしんの隊長たいさう直江ちかへ莊司じやうし包道ほうだう
宇佐美うさみ三郎ざうらう職政しやくせいの隊兵たいへい一千餘名よせにちよとわく梢地せうちの間道まなちより近ちかつたる里見さとみの後陣ごしん
東辰相とうてんさうが義通ぎつう君きみと守護しゆごあり馬うまを立た士卒しゆそと纏まとめて敵てきと自家みづかの閉戦へいせんの勝負しやうぶ
甚おほとち觀みて在ありけり這一隊このいちたいの背せのころ咄おどと嘯あめて攻せめ蒐かるを辰相てんさう毫こも敬あやむ色いろ
る謀まを士卒しそと推鎮おしあづめり又また蝮へびく隊たいと建更たてりえ敵てきと逆さかへ桃ももと戦たたかふ這後陣このごしんと
先陣せんじんの間ま二二三町ににさんちやうの中なか在あり兩所りやうじよの閉戦へいせん違ちがひければ義通ぎつうの騎馬きまの邊へ邊へわ
老黨らうたう近習きんじゆと除のぞくの外ほか從兵じゆへい四五百しよひゃくご過ありけり然しかば長尾ながお景春けいしゆんの風かぜ是これを
観みひ知りけん雄兵ゆうへい八百餘名はちひゃくじよをわく岐道きだうより一ひと忽たち焉まと驀ま直ちか義通ぎつうの隊たいと
蒞た推蒐おしあづる疾はやと宛颺あやの如ごとく短兵たんへい急いそる所ところ勅敵しやくてき里見さとみの士卒しゆそ吐嗟とたと

むらり皆蒐おしあづ逆さかひ推隔おしあづて敷しきち敷しきれつ血戰けつせん義通ぎつうの近習きんじゆ白濱しろはま十郎じゆらう七浦しちうら二
郎に朝夷あさひ三弥さんや老黨らうたう鳥山とりやま真人まこと人を喚よび做なす者もの就あ中善敵ちゆうぜんてきの中なかりて士卒しゆそと励まし
踏ふ入い々々々々と先途せんたうと敦結あつむすぶ刀やいばの鐔音たんとん馬蹄ばていの响沙うやと踉起りやうき刀頭やいばより火ひあ
ちで戦たたかふりのころ景春けいしゆんも亦また東園とうえん其その名な少すくす猛將まうしやう銳えいと摧くだき固かたを辟ひらく
義秀ぎしゆ親衡しんかうの勅勇しやくゆうるにわねびつら馬うま上かみ鎗打あしう振あて近ちかつ敵てきと突伏つたせ々々々々秀しゆも
ああ大将たいさう組ぐみと找たづね虎威こゐ狼風ろうふう里見さとみの士卒しゆその心こころも辟ひられ麻あ非ひ流りゅう敷しき散ちら
既すで危あやく見みえらる義通ぎつう馬うまを東西とうせい馳遠ちえんり馳返ちへんして敵てきと擇えらむ射やて敵てきを矢續やつづ
速すみのぞ煨煉あぶらあえれ強つよ心こころて文糸ぶんし々と敵てき死しる者もの多おほりけり現げん去きの君きみの重おも年としまで年とし
尚なほ十五じゆご不足ふそくされど世家せかい良將りやうしやうの兒孫こゝろや且かつ先祖せんぞ義家ぎけ朝臣あその少年せうねんより時ときも似にこれ
自家みづかの士卒しゆそいへば敵てきも亦また心こころある老兵らうへい舌したと卷ま々々感かんずあり或あるは又また勇ゆうありて
名なと好このむ壯士さうし敢あ其死そのしを見みえらる前まへ前まへ找たづねもまうりけり然しかば這こ乱軍らんぐん義通ぎつう

危うければ、里見の先陣、後陣の隊長、東辰相、洞就、鳥古内、振照、俱教、二以下の
 頭人、武勇の毎、疾、這敵と、撃退けて、王將を、搦ひまゝと、心、弥、悍、端、も、ど、も、
 前後の敵、不、嚼、締、られて、毫、も、追、は、る、と、な、れ、ば、士、卒、の、胸、臆、皆、安、ら、む、と、怯、れ、な、
 ぬ、と、も、竟、然、敵、不、推、戻、され、て、總、敗、軍、と、な、る、と、浩、然、不、誰、と、知、む、西、北、の、
 支、道、より、走、り、出、來、る、一、隊、の、客、兵、其、隊、僅、一、百、許、探、甲、さ、ら、む、然、も、皆、
 身、甲、不、針、脛、衣、し、て、小、長、械、と、杖、と、一、刀、一、騎、馬、武、者、を、并、ぶ、中、一、二、個、頭、
 領、と、見、え、る、其、人、青、年、二、十、可、り、面、の、色、白、く、骨、相、特、不、賤、一、身、
 又、烏、草、絨、の、敗、金、甲、を、探、く、火、形、打、る、頭、鎧、と、戴、り、腰、不、大、小、の、二、刀、を、跨、
 ぐ、小、雙、鈎、の、鎗、を、執、り、相、貌、堂、々、威、風、凜、々、衆、不、先、を、鼓、耳、高、や、ふ、を、景、
 春、を、礼、を、せ、里、見、八、大、士、の、知、音、と、武、藏、園、の、浮、浪、人、政、木、大、全、孝、嗣、あ、り、
 退、け、や、つ、と、喚、れ、ば、左、右、不、從、老、壯、四、個、の、猛、者、們、も、衆、聲、苛、め、く、我、其、數、あ、

絲、も、亦、是、犬、士、由、縁、の、石、龜、次、團、太、越、卿、二、向、水、五、十、二、太、枝、獨、結、素、吉、
 乾、父、乾、兄、共、侶、小、里、見、殿、の、加、兵、と、名、告、け、相、叫、り、て、身、勢、不、撓、を、先、と、争、ふ、其、
 隊、の、壯、佼、五、六、十、名、持、ち、長、械、振、閃、く、敵、の、乘、る、馬、の、脚、を、難、仆、拂、ひ、落、し、
 起、ん、と、も、と、擊、殺、を、勇、悍、一、致、の、掃、は、長、尾、士、卒、の、驚、駭、謀、を、憶、を、激、と、乱、る、と、
 孝、嗣、は、と、割、り、入、り、鎗、の、尖、頭、血、を、濺、り、て、瞬、息、間、敵、幾、名、斃、伏、せ、又、刺、
 殺、せ、次、團、太、卿、五、十、二、太、素、吉、皆、共、侶、水、成、を、大、刀、と、り、て、拔、腰、し、て、敵、の、
 中、り、く、樹、を、盡、せ、里、見、の、老、黨、近、習、の、毎、鳥、山、真、人、白、濱、十、郎、七、浦、二、郎、朝、夷、
 三、弥、以、下、の、雄、兵、是、れ、氣、を、て、装、更、を、刀、頭、尖、く、ぬ、も、る、け、れ、ば、長、尾、景、春、怒、り、堪、
 ぬ、馬、上、不、聲、と、苛、立、て、蓬、は、自、家、の、兵、毎、哉、敵、不、加、兵、の、あ、れ、ば、と、一、百、名、不、過、さ、る、
 何、で、不、怕、る、と、や、あ、る、疾、推、包、を、數、も、果、さ、と、哮、り、喚、り、近、つ、敵、を、鎗、の、く、拂、
 奮、奮、敵、突、戰、猛、將、の、下、不、勇、士、ら、れ、ば、景、春、の、隊、の、兵、と、又、あ、の、一、句、不、罵、勵、



八代将軍御前

文政堂藏

して建更らば挑戦ふ三陣の野戦五角まで勝敗果一まらけり。詰分両頭介
 程小大江親兵衛の前月の下津秋篠條將曹廣當と那石某師の頭も既ふ
 相別れり。則廣當の教ふより敢東海道不赴る尾張と過り信濃路より
 上野及武藏下總と歷て、蝨く安房へ還んと。姥雪代四郎以下の伴當親兵衛
 いそぐ立ちゆく程ふ次の日より那馬走帆何と病る容みく。豆草も亦
 多く喫る路とゆく遅く作りかど親兵衛心長閑く。是を勸りて敢亦
 うちも兼らる親兵衛も是を牽せて只其の儘せり。一日僅四五里ゆく。歇
 店と投る夕まら。左右も程は稍信濃の馬籠に至ると歇を客店と投り
 宵より走帆の疾病ゆる重くる。臥る隨も起もなれば親兵衛痛く是を憂
 ひて伏姫授與の神某と命出て其舌小塗まうして親これを飲する。人畜其差
 る故馬其效ある欲或は是死病を神某の至妙なるも及ぶ者ある欲と

思難く徒ふ只這病馬の故とて逗留四日小速びく。代四郎紀二六心焦燥
 づ隨ふ俱親兵衛を諫ての事。和子の慈善今創めを愛顧畜生不き厚
 加へ人の及ぬ所を漸京師の厄解て還ることを命ひ。又那病馬小構つらひて
 逗留七日と費しぬ。口は是知智者の一失狹仁義も時因る。遙く安房の
 めと思へ。兩館の言もゆる妙真刀自犬士連の朝居夕居人止て。俟不樂
 在さん。その美を思ひぬ。と。代は説出て。卿言が。急せ。親兵衛是を
 听て然。我も亦其頭の事と思ひ。争何。其那馬ハ虎妖對治ハ大功
 あり。那時他より我を馳せて進退自由なる。我何を。那功と奏して安房へ
 還ること。鏡されんや。然。那馬病臥り。去向とい。吾も不仁不義の
 甚。心牛馬も。不如とい。れん。故。我。走帆と政元主の賜。と。敢。鐘
 愛。あ。あ。只。那。大功。あり。今。其。死。活。を。見。定。め。と。吾。も。不。心。び。か。

のそ然あつたやと解論六代四郎紀二六感服して又ゆるりもるり漕地喜勘
太伴當親兵衛もさへあつ知りて現這神童やて這仁義の今古和漢不獨歩
まを感嘆せらるるのり。然而あつたの日本病馬走帆ハ斃れ親兵衛只顧
嗟嘆してあ馬異日戰場用ひる関羽の赤兔馬も優る縁薄くして其
里に至るぞ嗟夫惜むべし他今馬籠の御して命空くちける昔義仲の愛
馬を牧せし因の縁も名詮自性独ある亦一奇といふものと獨語に遠く
逆旅主人を召きて件の馬の空骸と今宵近山山陰に瘞せんと相譚余敢旋
陀羅の身を借るを以て命を合せと思へん當下親兵衛代四郎を喚びしを
豊山富山宅令娘達を馳來おける那靈馬の骸を瘞せしその折にふあひ
やん今開儀未あねども我聞唐山古昔の制度も狗を埋る蔽蓋を以て馬を埋
る蔽帷を以てしる。あつたの礼記の檀弓に載り蔽蓋敗るきぬき也蔽帷ハ

ぞれたれ布有徳れ今我ハ旅中あれ然る東西大獄ありて死ハ固許然り
合せ走帆の亡骸を裏せんと吩咐れ代四郎聞き異議も噫和子の博識を
今稍あつたゆひの咄が富山で那靈馬を埋り折に密窟の内東西然る
故事と知れ直埋りてはと答て軀を退せ却紀二六と親兵衛も件の事を示
あつた形如く執りて鞍と鐘の送り親兵衛則逆旅主人あつたを預る
せ異日あつたの道場馬頭觀音院へ藏めり然る這夜女瘞駛の事果一六
其詰朝親兵衛代四郎と紀二六と喜勘太伴當五個の親兵衛と相從て只管
路次といふ時十一月既盡る十一月五日ふりけりあの日親兵衛ハ一霎時
茶店小憩ひ折代四郎の叫ぶ我ハ女神の冥助も文学武藝何れも自得
せざるはるは水戯水馬の術といふも學子得ざりし是豊山奇子崎の賊難ハ既ハ
溺るべしと更の援けよと恙るる開と朽惜く思ひし昨宵我愛裡ハ身ハ又

富山の山崖に在り。姫神出現す。ゆて水戯水馬の一術を教ふ。と町守宅且宜
 我始より這一術を汝に教さうけり。胡意欠く所を以て懲してみらる。其歳なき
 ありとえけり。然りければ。今戦國の時。當りて水戯水馬を學び給ふ。戰場に臨む。と
 何ぞもく。波を被れ。水と涉りて敵を征せ。或は君將の危殆を極ひ。或は身の
 亡ぶを保つに至る。水と知れ。善くも。勉めよ。か。と諭し。ぬ。と思へ。曉の鐘枕
 响る。忽馬と駁馬に覺る。覺ての後。是を思へ。実ふ。と學得く。その身。備る者。不
 似。の意。不異。日館の死。為。水戯水馬を用ふ。死時。も。亦。然。る。ゆ。と告る。と
 代四郎。うち。夢。の。五臓の疲勞。不。成。ると。人。の。い。へ。と。和子の。夢。の。久。く。京師。に。留
 せ。れて。日。と。多。御。を。思。ひ。宿。の。所。以。の。と。思。ふ。ゆ。水戯。自。治。実。事。あ。ら。必。是。姫神の
 神護。る。靈。靈。愛。ふ。と。い。ひ。わ。と。言。正。首。不。合。る。折。る。忽。地。四。下。開。く。人。東。西。奔。走
 を。開。ぐ。中。小。土。民。們。が。這。茶。店。の。邊。不。立。在。て。且。相。告。る。と。う。ち。穿。く。其。人。の。い。や。

和主。今。番。扇。谷。の。管。領。家。の。安。房。の。里。見。と。怨。と。あ。り。と。よ。の。故。の
 山。内。の。管。領。家。と。和。睦。と。あ。り。て。且。近。國。の。諸。侯。と。連。ね。て。海。と。陸。と。安。房。上。總。下
 總。と。一。時。不。政。令。と。あ。り。日。猛。可。と。這。頭。へ。軍。役。と。宛。れ。り。今。朝。亦。再。度。の。催
 促。あり。水。路。の。扇。谷。殿。御。父。子。向。せ。る。軍。兵。約。莫。五。六。萬。多。べ。又。陸。路。の。寄。隊。を
 穿。く。下。總。多。行。徳。口。へ。扇。谷。の。御。嫡。子。朝。良。君。と。千。葉。自。胤。主。と。兩。大。將。を
 大。石。兵。衛。尉。殿。副。將。と。大。石。石。見。守。憲。重。の。始。兵。衛。尉。と。あ。り。の。本。修。第。四。輯。と。あ。り。亦
 其。勢。二。四。萬。多。べ。又。圍。府。臺。の。城。へ。山。内。殿。御。親。子。と。濟。我。の。御。所。と。兩。旗。旗
 之。從。ふ。城。王。隊。長。多。り。其。兵。六。七。萬。多。べ。通。計。一。十。五。六。萬。の。大。兵。を。海。と
 陸。と。攻。め。ら。れ。る。哀。れ。安。房。殿。の。滅。亡。と。い。ひ。一。人。が。然。が。と。里。見。殿。の。今。の
 世。稀。有。仁。君。と。云。嗚。呼。逆。逆。と。八。犬。士。と。の。猛。者。あ。れ。非。如。軍。兵。多。り。と。い。ひ
 多。と。束。ね。て。徒。の。負。人。穿。く。洲。崎。敵。と。逆。る。水。軍。の。大。將。の。圍。守。里。見。殿。を。

軍師の大阪防御使の大山村隊長より又行徳へ大川大田園府臺へ圍
 守の公子義通君と將とて東六郎後見より防御使の大塚大飼の餘も隊
 長よりとて公の實言欺虚言欺開の左も右もあれ左右村の事され歳梢莊客暇
 ある骨休せま支役も差左軍要金さへ召るれ。今茲餅も搗ごかくんそれ御互々
 と両味の郊原問答勤し中中空言と暗く高聲山里人の忌憚りも拍肩と材
 榎天願掉低けて卒となら小東西へ別れて亦復走りける。余程大江親兵衛ら
 心ともく件の言の首尾を知らず。胆も潰ら代四郎も目と注まるの。言や
 坐を代四郎と蝨くあらゆて茶博士の幾十文飲茶錢と還せ。紀二六も登
 児を放ち外も立く。親兵衛共侶親兵衛も相從をゆく。十町許あり山井陰の樹
 柵深た処山神廟あり。這里の乾淨る処にて人煙遠く便り宜けれ。親
 兵衛も立るとて代四郎們も叫く。更も具耳入りけ。我君危急の一大

事と人の噂も知らず。翅る身も怒るの。因てか武藏より船と求め。安房へ
 還らむ欲り。必敵に柱られて渡るとの。下總より真間園府臺の
 則是今番の便路也。且御曹司の那城と守らせぬ。上野と歴て武
 藏に至り。千住河をち渉さ。那城も参り易く候べし。今より夜を分長
 途を走りて疲勞免為。姫神傳授の神菜と服もあくる。我這一隊も分
 り與へ。神也と俱も甘き。後る者も怨もられん。代四郎の美を
 諾りて腰も吊る。某籠より那仙丹を合出り。紀二六並小喜勘太親兵衛
 當們も此をり。嘗さる。我身も又是を嘗る。心地よく清爽也。千里も一日も
 白く。勢力あり。然るれ。皆共侶の処を立出。走る。奔馬の如く。幾十里
 狭ひと目も来り。見の目下。薄氷の麓も造り。這里も新関あり。門戸を
 鎖く。東へ過る人を饒さ。親兵衛們も至ると。只得其頭も歇店と求め。

詰朝早天より。歌店と出て。情やふ人のかゝる山路入り。峯を降り溪に降
 風く武藏ふ至り。多く欲れども路を迷う。投まきふ出ま山路。一旦暮せども神
 茶の奇効あり。主僕俱に餓む。疲れど心も。二四日と歴て。十二月八日の黎明
 武藏石濱の城。程遠かる。千束村の邊。ふりけり。然る昨日より。山内里見
 敵。葛西假名町。あり。一閉戦の勝敗。又暴河堤。岡山。攻敵。社。夏。も
 街談巷説。よく知れり。親兵衛。あふ至て。代四郎。紀。二。喜。勘。太。親。兵。衛。們。を
 送る。身邊へ。招き。公。も。既。は。知。る。館。の。御。大。事。は。是。通。り。今日。岡。山。の
 御陣。入り。参。り。御。曹。司。の。御。先。途。は。遇。う。後。悔。臆。と。噬。ん。然。る。と。捷。路。と。破。り。て
 墨田河を。涉。り。石。濱。の。城。兵。が。怪。む。趕。蒐。て。敵。を。捕。ま。せ。開。け。怕。る。小。足。ね
 ども。益。の。敵。不。拘。ら。る。今日。の。閉。戦。は。値。さ。か。ん。の。故。小。住。河。を。憑。渡。し。て。龜
 蟻。葛。西。の。造。り。岡。山。へ。近。く。黎。明。な。る。人。稀。く。各。々。戎。衣。せ。長。柄。の

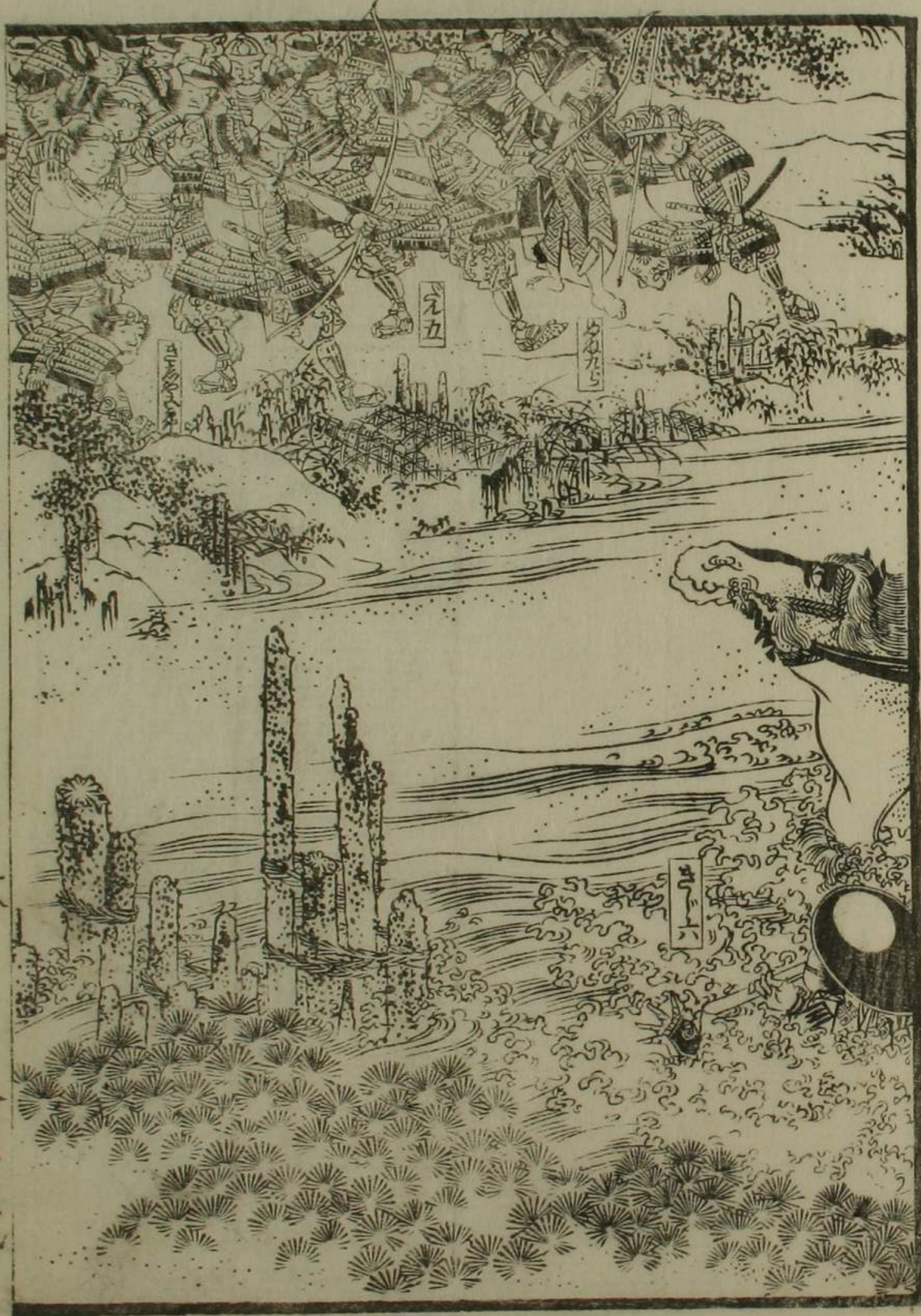
器械と執る。あつた敵は。蒞りて。不便。る。見。る。小。那。里。の。白。屋。の。背。門。不。倚。け。は
 連。切。り。連。切。り。軍。陣。是。と。用。ひ。其。利。あり。の。の。唐。山。の。書。籍。小。見。を。ら
 然。と。も。農。民。の。田。器。と。奪。合。を。あ。る。を。價。と。送。ま。罪。を。喜。勘。太。親。兵。衛。を
 あり。て。其。残。れる。連。切。不。是。を。結。附。て。と。の。懐。と。搔。撈。り。方。金。二。片。欲。三。片。欲
 紙。不。枯。り。と。令。ま。れ。人。皆。並。て。親。兵。衛。が。信。折。り。折。り。折。り。心。正。し。た。を。感。け。け。り
 當。下。大。江。親。兵。衛。の。伴。當。不。馳。一。本。甲。由。曾。權。と。う。ち。閑。せ。鎧。と。探。け。兜。を。戴。死
 大。刀。と。跨。身。を。固。め。且。伴。當。が。肩。不。あ。る。鎧。と。執。て。挾。ぬ。代。四。郎。以。下。の。衆。人。を
 皆。遠。く。戎。衣。ま。る。代。四。郎。紀。二。六。と。行。李。の。内。身。甲。あり。其。身。甲。を。穿。者。皆。針
 脛。省。の。と。あ。り。喜。勘。太。親。兵。衛。が。令。ま。り。て。來。ぬ。連。切。を。な。ま。受。取。て。准。備。立。地。成。り
 親。兵。衛。の。先。不。找。と。千。住。河。原。と。投。て。程。不。後。方。に。續。く。代。四。郎。と。屢。見。各
 傳。い。ま。う。更。上。我。の。身。夜。の。夢。不。姫。神。我。水。技。水。馬。を。教。め。と。見。て。了。る。既。不。是。其

者もまゝにさしあはれし者も似たる今日の所要不達と見と。夢も入らぬ幽真人間
 御と学びし者も似たる今日の所要不達と見と。夢も入らぬ幽真人間
 異るれども今も常影不立ち形も添ふて徳も不慈愛のみ。神恩の過分は成
 仰だまるとも猶良しといふ代四郎點頭て然也と。寔は小公も那御神の恩徳へ
 小可一家も相同。實は是天地父母國土君上師授神佛の六恩と辨ぬぬと
 昏る間も千住も大河邊も来さければ親兵衛後方を見らるる。野兵伴當們不
 公。這大河を渡りゆれば則下總を那裏今閉戦の最中なれば這頭も船の
 渡も危し。徳は皆馮心渉して前岸へ至ると勿論へ縦今去冬大寒の時
 るも及谷各既も皆我神茶と服しこれ水も入るとも凍るともけいあのみ心易く
 べ。約莫水枝をゆらるも亦得ざるも俱も神茶の奇特も。溺る者もろろん余或は
 連柳も相連り或は迭ふもと推して我も續て渉まし。いでとといはれも既も水際へ
 找む折る怪むべ。前面の岸も走り出ると一箇の馬の疾と宛鶉の像く河へ夾

と入ると見る間も其馬殊不逸早く這方と投て近く程も親兵衛代四郎といはれ
 紀二六喜勘太自餘の伴當他へ甚麼とみるも俱も訝る開か中も親兵衛へ眼敏
 く代四郎の父も。叟いふもるやん那馬の毛も我愛馬も。青海波も似たるも
 開の左も右もぬれ那馬必駿足るも。今大河をうち渉も聊も憐むとす。半
 身波より上へ出ると其速るといふも我今戰場へ赴くも良馬とゆふも幸いなる哉
 登ると待と馳駐めぬや。といふ代四郎紀二六喜勘太伴當相諾もして行李も附
 たる麻索も解き伸し相構も。登ると遅しと俟程も件の馬も水を出て汀渚も
 立ち身震し。敢又走りぬせも徐も這方へ来なければ大家俱も立蒐りて。輒もあれを
 牽駐めけり。登時親兵衛立下りて見ら。憶も含笑も。叟も今我も。違ふもあ
 是紛ふもあぬ我馬青海波も有ける。曩も我御使も奉りて。京より来ける
 日。水行るも故不足を牽せも。厩櫪も嘗も預け置し。京師も政元主の那走

帆を賜りしより。虎妖對治不我を幫助けし功不愛て捨る不刃心む然とて。這青海波と忘れらるるあつたも。現兩雄の雙立を晝夜の同時小長く。那馬去て這馬來ふける。抑得失の天の時人然るものも。這馬逆不安房より來ふける。鞍鏡の老侯の臣も賜ひし隨ひて。上總と過り下總と麻止る。我身を迎るる忠信情義那走帆不勝れると十級百級愛欲現狀幻欲奇く馬不あつた。と稱て感嘆をうり。代四郎紀二六以下の伴當野兵もいとく一唱之歎の神童あつたり。其の奇特不遇ふ。やと思へ心勇れて。縱今日百萬の大敵中るとも何ぞも勝るるとあらんやと。皆憑憑た附驥の情あり。當下親兵衛又のや。昔唐山齊月の管仲の深雪の山路不迷ひ折老る馬のゆく不信せて。還るともゆるるとも我も亦の青海波のゆく不鞆を儘せる。必や御曹司の御陣不蝨く届るべし。各馬の尾不携り或の鐘おもて。撰て俱不歩しね。滿れると。云の鎗を突走馬不囚り。とら

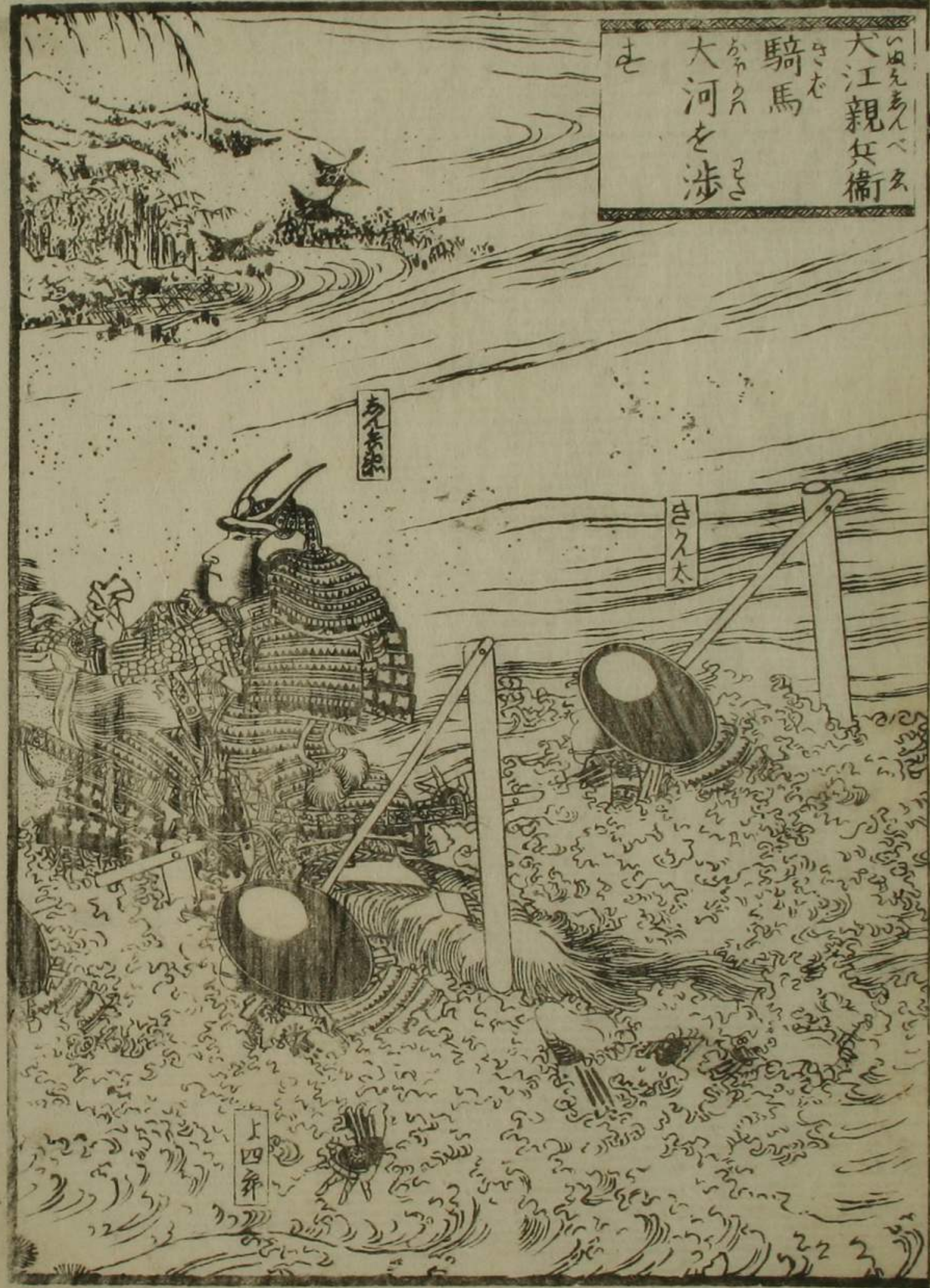
の。腰鞆し鐘を提拍く。河へ颯と騎入る。代四郎紀二六以下の伴當野兵も俱不身を跳らして。續記を飛入る。河水の現神其の奇效るべし。温か々冬を覚ゆ。且水技を知らざる者も。身はよく浮く。易らける。開が中。親兵衛の靈雲夢より。水戯水馬の術をよく做すの。馬の名不負。青海波の駿足。去の時見れて。水中陸より易らける。代四郎紀も先。と五六反。前面の岸不近。程不思ひける。此小敵あり。其隊僅小五六十名。比自較皮甲。曹不身を固めて。槍棒眉尖刀を引提する。真弓角弓を執れる。あり。東の塘堤。立見れて。親兵衛より。其蒞る。彎固り。又亦固めて射被る。征箭の雨より。滋く射く。落さると。競へも。親兵衛の毫も。怕れ。兎を傾け馬を囚せ。前目の塘堤。不難。勝る。敵兵們的相逆へ。推捕龍て。數るんと。當下親兵衛聲高や。若們。是。何人。を。里見の。八。大。隨。一。人。犬。江。親。兵。衛。仁。を。知。ぞ。知。む。本。事。と。見。せ。む。と。の。よ。早。く。鎗。令。伸。て。打。拂。ひ。又。打。付。む。向。ふ。前



八十八

十八

八十八



大江親兵衛
騎馬
大河を渉

あふ

さく

上四

八十八

八十八

る死勢い猶懲まする川鳥の群立ち像く挑む程小姥雪代四郎直塚紀三六
 潜地喜勘太伴當野兵も推續は渉り来て敵と擇ま連柄めて毆伏せ捷
 折く利便の器械其機小稱へ敵ハ乱れて逃走る猶漏すとと奸蒐る親兵
 衛急ふ吸返して叟上直塚も憚るべからざる益の敵小時と移して御陣へ参る
 期と喪は後悔其里小達さかん因て憶ふ今この地方小這頭の敵のあり
 ける必故るまや我猜まる小這奴們的寄隊の士卒る野野武士山豪の類
 ありあらざるむ井が中巨瘡を負ふて仆さる這奴們的尚死ざるもある死小其来
 歴と責問まやと心を殺兵もちて一個の傷瘡見と左右より引起し捷惱して
 出処来歴と責問小始頼陳者かも緊く捷れて苦痛堪ぬ竟小招了處
 るや刀祢們や小実を吐ん姑且答と饒一久小可の這衆の夥計の是實の活
 小のめぬくらうよひるまよぬまよと
 間野目奴九郎と喚做る馬盗見てひ之然昨宵岡山る里見の陣へ潜び入る

良馬一頭と竊得て牽きて這頭へ来る程小豫相識る野武士の頭領西的寄
 舎五郎須々利壇五郎と喚做を猛者等が支黨五六十名を率て前面より来
 る小逢ひ因て馬を售る思ひ見せて價と定む程馬の猛可暴嘶して
 走り河へ跳り入りと趕へも速まりたる果れて長視て存ける小豈計んや其
 馬を大人小獲られらう跨ぐ伴當達も共侶小這方へ渉りあふるん寄舎五
 壇五郎の衆人小天場小大人を射て落し馬を合んと構へ大人の勅勇一
 人當千伴當達さへも煇煉め瞬息間より人の敵と毆散し數仆しと事
 竟ふる至れ有徳れ是小可那夥計の是を以て饒さをあひと勸解は
 只管口説けと親兵衛つらく果て代四郎小向ひてのや叟よ我の馬の来歴を
 今こそ思ひゆるされ必大塚う犬飼が我這回の閉戦小遇ざる最惜そ
 切て我愛馬を這青海波と戦場の乗馬をさき欲する故小這小安房より

既してこの頭領の大江の馬前近つたてて跪居る。併に許さず。小可等眼
 あり。任る豪傑と認めぬ。漫小其馬を欲する故。小可等と争ひ。飛毛を
 吹た疵を求めし。後悔の外。既して大江親兵衛と名告ぬ。小可はた
 皆逃れ。遠く去る。梢やう還りて。樹蔭小躲れて。便宜を待ける。小可等愛
 馬を竊る。這活間野目奴九郎と。饒一。寛仁大度。景仰の思ひ
 切れ。這身の罪を見え。願ひ稟さす。あつ。海客を安ん。抑小可等
 原是當國千葉の退糧見中。傳ふ氣を使ひ使と立る故。乾見。若者數十
 名。又年来交を結ぶ。野武士の頭領。高飛車。和女九郎。劍峯。齋四郎
 と喚做さる。他は原是常陸國の人民。其隊小破。落戸亦是一百
 十數名。まゝ。這回扇谷山内の両管領。里見殿と兵を構て。寄隊當國小
 發向と。比小可每。里見殿。從ひ。欲り。和女九郎。四郎の

議を用ひ。他は。彼我殿。從ん。路次。迎へ。信々。請稟。猶疑
 る。より。あつ。その義を饒され。故。和女九郎。里見の戦粟を奪
 略。欲して。五十四田の陣營の空虚。折急。推寄。陣門を打破。守陣の
 老兵を殺走。奪略。所の戦粟千幾百。菖菘。威是を船小積載。日暮
 河を溯。漕りて。去ま。程。追隊の兵。殺禁。其船を乗。論。和
 女九郎。齋四郎。里見の隊長。田税力介。とやら。搦捕。られて。竟。首。刻ら
 せ。この風聲。是を知。然。我。始。夥計。不合。故。憶。を
 時。日後。六。國府。喜。城。参。加。死。情。願。と。治。果。さ。得。這。頭。小。屯
 者。寄。隊。倘。ち。負。有。名。の。落。人。と。擇。撃。小。數。捕。開。功。不。一。義
 通。君。の。御。陣。へ。齋。一。愚。意。と。演。請。那。仁。君。の。御。蔭。依。欲。せ。齋。不
 活。間。野。目。奴。九。郎。が。牽。り。て。賣。と。り。馬。を。賊。物。と。猜。其。毛。此

模様波濤に似る異相多のふあはる雨眼背梁蹄を一箇も虧く所
 莫実稀世の良馬あはれ愛惜の惑ひ醒る由る漫ふ大人敵對して
 ろる罪を醸せし今や後悔の外ひる近曾里見殿の御内人八犬士と稱
 らる文武兼備の壮士達八名あり夫人傳少一の名も今ぞ知は大人の仁心
 武藝の精妙今古獨歩の英雄を驥尾の附せて俱一も夥計の兵毎
 従へて今日の軍小微力と盡さるの言倘詐譎あふ身天雷打摧れて来世の
 畜生道の苦と哀べ天神地祇も照監あれ急々如律令と唱へ俱前を折
 りて折言と做す送代の胸忠口誼誠心氣色不見れと親兵衛馬上听果る感
 ざる事大々言ふは原來是和殿の執も義侠の人なり既にして我君の盛徳と
 慕ひまつて俱歸服の情願ある我豈汲引せざるや夫賢と薦め士と擧
 る八人の臣る職分事由と嘆え上る必や用ひられ我初和殿等を知む一

霎時相戦ふ程小捷仕ける傷瘡兇幾名歎る存り遮莫我お神授の仙
 丹あり是を用ひ時を移さる皆立地お愈べし先其下の衆人を召集へる
 といふが寄舎五郎と壇五郎の悦び堪言兼ある俱後方と見たりと
 招け出さるる下の衆人樹間藁塚の蔭より陸續として近づき皆親
 兵衛の向ひて跪居て額を衝ぬる當下親兵衛の代四郎と喚ていさう豊
 よ和老の腰を茶籠に残れる仙丹猶有ん并に些なる傷瘡兇を施して
 起せまよと代四郎あり腰を撈り茶籠より那神茶を合出せば紀二
 六喜勘大も傷瘡兇不嘗さる喜勘大の目奴九郎も施さん
 とをける親兵衛急喚禁めてやれ喜勘大其奴の隠れ我今其奴一
 人を憎て情をあらねども其奴撲傷亟お愈る身の掙は自由なるべ
 必又竊盗とせん御高我誅ふ人の戎衣と剥合ふ那身再生の恩報

ふべし。このひの次晋見根性るる。有信れが上。我教諭。従来似れども。癖の改めたる底意の今の一言を知られら。ちよとて他今より。庭弱不具。在るる。一生涯を異りて。其天年と終るべし。其の故。我を他。の。敢神某。と與へざる。是情をたよ。あ。反。く。慈悲。仁の術。へ。惑。ひ。と。取。て。怨。を。せ。そ。と。理。り。切。て。解。諭。せ。日。奴。九。郎。の。敬。頭。と。悲。し。や。あ。ら。う。我。の。後。坐。脚。車。の。法。衣。世。お。墨。流。の。住。不。樂。て。鉦。を。敲。て。終。り。や。せ。ん。哀。れ。ら。る。と。伏。沈。む。程。も。あ。ら。う。傷。瘡。瘡。見。們。の。神。某。あ。お。即。效。あり。傷。愈。痛。消。散。して。氣。力。日。来。二。十。倍。の。強。ひ。堪。え。れ。比。身。尊。然。と。身。と。起。り。て。跪。れ。親。兵。衛。を。伏。拜。む。と。數。回。奇。也。と。稱。賛。の。聲。と。合。せ。感。え。れ。親。計。の。衆。兵。へ。は。ゆ。え。寄。舎。五。郎。壇。五。郎。の。俱。お。奇。小。敬。馬。の。敬。服。して。親。兵。衛。向。ひ。て。い。ふ。事。定。小。大。人。の。妙。用。巧。致。華。陀。蒼。公。も。あ。ら。う。べ。死。活。人。の。も。段。不。可。思。議。を。哉。就。て。稟。一。試。ん。と。思。ふ。一。議。を。信。

いへば。と。目。奴。九。郎。が。諛。言。京。做。ふ。お。わ。る。小。可。們。の。這。人。數。の。外。小。猶。甲。曹。四。五。領。弓。箭。鳥。皆。銃。あり。い。ふ。事。今。日。御。加。兵。の。贖。代。小。伴。當。達。か。ま。あ。ら。う。せ。ま。く。欲。ま。よ。の。義。を。饒。し。ゆ。ん。や。と。請。ふ。を。親。兵。衛。う。ち。听。く。現。和。殿。們。の。我。君。の。盛。德。を。仰。せ。ま。り。新。參。の。義。あ。ら。う。今。も。一。く。後。我。も。伴。當。們。も。則。是。祿。と。與。ふ。と。な。れ。朋。輩。る。れ。小。介。意。ま。さ。づ。も。あ。ら。う。況。や。今。日。の。戰。場。小。我。隊。の。士。卒。小。素。肌。の。者。あ。ら。う。人。必。怪。む。べ。く。且。外。聞。も。宜。し。く。と。然。る。と。今。幸。小。和。殿。們。兵。具。小。餘。り。あ。ら。う。り。と。并。と。贈。ん。と。い。ふ。事。折。り。う。便宜。と。い。ふ。事。一。臂。近。お。あ。ら。う。小。令。お。わ。ね。い。と。せ。六。寄。舎。五。郎。等。欵。び。兼。て。隨。即。小。下。の。兵。每。小。恁。々。と。吟。唱。れ。其。兵。每。身。を。起。し。て。遠。く。ぬ。茂。林。の。内。より。日。取。大。に。る。竹。考。筈。と。十。箇。あ。ら。う。背。駝。を。蓋。を。開。け。合。ひ。出。ま。甲。曹。十二。三。領。鑊。砲。七。八。挺。あり。けり。則。是。を。呈。ま。れ。親。兵。衛。聽。て。代。四。郎。等。小。分。ち。與。へ。く。探。甲。あ。ら。う。當。下。代。四。郎。紀。二。六。喜。勘。太。親。兵。伴。

當們の寄舎五郎壇五郎と其毎小名對面して歎びと速く身と固る時
 親兵衛がのち我隊の兵を皆連枷われ器械小事とたねども然も侍
 品する者の農具をのり敵に向ひの面正しもるに所行るべし見るも銃砲も七
 八挺あるやむや開と曳と直塚と喜勘太と野兵五名の推乃くやくて七
 九伴當六名の故のて連枷を放つべしとていそそび大家唯々と諾
 りて準備をやく成りて親兵衛樹杪を仰瞻て憶む時を移りて朝
 日の既高く昇り辰牌をやくぬべしとて騎馬の泥障と蹴鳴
 らして青海波々々我今御方の陣所あり多く欲む然ども其捷徑を
 知らぬ去向と徐に任せてんや疾我を導きね大家續けと喚く馬を拍と
 走りまれば皆後れと相従ふ親兵衛が隊の兵も姥雪代四郎と首わく伴の
 奴隷に至るまで僅小足十四名今是加ふる二四的寄舎五郎須々利壇五郎

其毎六十五名合せて七十九人より一百名不足らねども勇將の下弱卒をけられ
 皆大敵と怖る者多深山と若鷹の振鷺を驅る威勢奮然其侍あり
 あつこの土小骨冷されて立ちまると踏見の命活向野目奴九郎の身三人をも然
 たる面と皺め目送りけり目奴九郎の事よ下小話る小程小の朝里見太
 郎九義通君の信乃現八名が二の寄隊と閉戦の危を援んをみる岡山の
 陣営より推か其方を投ぐ士卒と找る其路も遠く相川の松原を長
 尾判官景春が岡山と推寄來多數千の境兵相逢る前後中央二隊不
 警られ閉戦違あるとみれば里見の隊長東六郎御就鳥古内振照根教二
 白濱七浦朝夷們のゆり突然と来て里見と援る政木大全石龜次團太
 越郷云向水五十二太枝獨鉦素多吉其も小従ふ高師舵工俱小長械を
 うち振て苦戦の時を移る就中政木大全孝嗣の文武兼学ぶ士あり

弓前執て、為朝の核臂と旋らまひ段あり。器械不縁る剽姚ハ牛孺丸も劣らざるべし。一人當千るものなり。景春も亦東園也。一二を争ふ勁將なる。且軍学不疎を、孫子の兵法諸葛の八陣、鞍馬八流楠氏の七策習ひ、いづれも多とみければ、士卒と使ふる脚の如く、みづから屣敵の中り。力戦のまじ、雌雄を決せむ。有徳より程を長尾景春の最愛の子、長尾太郎為景と喚做す。少年あり。今茲十五歳の初陣あり。其機雄親不劣らざる。父不俱して、その地不あつた。その日の為景遊軍あり。隊兵僅か二百餘名弱らん。方と援んとも敵の隙と覘ふ程、里見の先鋒の頭人、潤就鳥、古内振照、俱教二のの時、既不戦い疲勞れて、隊竟乱れり。為景ゆり。士卒と找めり。自家の隊長梶原景澄、樋口維龍と相援けて、透のあり。殺類を勢ひ宛、虎彪の像く為景、みづから鎧と搦して、只一刺ふる。古内を馬上より突落して、又俱教

二不傷と負され、一陣竟乱れ麻非。總敗軍あるんことを、浩処不其、西の加より。探甲する武者一騎、蒼鷹直不走せ。來身勢ひ宛、飛鳥の像く、從兵五六十名、皆神行の術と、おびけ疾走ると、駿馬不後れ。衆不先なる騎馬武者、近く隨ふ聲震立ち。其里なる敵の旗の花、晞あり。あるは白井の景春あるん。恁公我を知るや、知らざる。里見殿の御内中、八犬士の隨一人、大江親兵衛尉、金碗仁あり。不在の同、潘の老兵、姥雲代四郎與保、蛭崎の若黨、直探紀二六、新參の野武士の隊長、二四的寄舎五郎須々利、壇五郎們あり。不在あり。と名告被け、相叫り。いづれ引提し、鎧砲を令直敵不向ひ。連發して、銃响と俱不揚ぐる。喊聲耳を驚見見る。衆敵の真中へ、親兵衛馬乗入れて、鎧の四方八面と中る。儘せき、薙仆。歐伏せし、拂ふ奮勇、獨歩の拵。代四郎紀二六、喜勘太們、野兵相當二四的、找む須々利と、隊の兵等、

奮戦多突戦せざるもるけれど里見の先陣後陣の隊長東六郎振照俱教二及
 義通の隊下る鳥山真人朝夷三弥白濱七浦是の氣とゆふ奮勇始ふ十
 倍ある士卒一致の大刃風然しも長尾の勅敵も三陣一度不殺頼されて
 或の疾も負ひ或の敷も鮮血一り看み跌は皆蟻子雜と敷る像く澄
 と敗れて逃走れば景春為景怒り不堪ぞ罵林れども甲斐るりける梶原樋
 口守佐美直江も逃る士卒不誘引れて將帥歩兵の差別る葛西のくへ
 乱走去身と大江親兵衛政木大全其隊兵姥雪直塚須々利壇五の四的當
 る時運向水水由縁の石亀も藻束卿二枝獨鉦も自家の衆先もて刈
 拂ふ敵も息も類れぬ漏さずと逐らける畢竟大江親兵衛が歸東の忠戦
 時を得て石陣鐵馬も湯と做まもる鋒先殊小剛り長尾判官景春の勝
 誇りる數千の勅兵を一舉不敗り走らせ義通君の初陣武門の花を閉せ身

後の話説甚麼を分教あり。奔馬追北大江籠暴禽舊恩報得成
 孝完前言。あら後回の題目の猶詳不知も欲せ又下回解分ると聴ねか。
 作者云々の編の必六巻ありて續出を免者有り何とる本回大塚信乃大飼
 現八杉倉武者助等が寄隊の敵將頭定成氏憲房と三面二度の闘戦ありと
 のも勝負と決まる速るに又里見義通の野戦難義の時政木孝嗣石亀次園太
 越卿三向水五十二太枝獨鉦素多吉と其徒數十名と以てゆきて義通の苦
 戦を援る話説ありと。孝嗣次園太卿二名の來跡止とて小具不寫ま不延あ
 らざるの故の第百六十七回まで今番續出て是等の事と詳やく看官不
 又細く示さきく欲しけれども刊約の書肆の板毎五巻と可とて六巻と欲せ
 せ一卷多くて價と増せば賣買の為妙なるをといへり。あも亦故あるるれ愚
 意と枉て其好に従ふることゆぞ敢請江湖上億兆の君子達那闘戦の勝敗と

孝嗣們的來歷と知る欲さる又復後板五卷と續出ま日を候ねか。
 作者又云本傳の始より九輯百七十回りて必局と結んとかの。あをりて九
 輯の四十五卷之是を先例の如く一輯五冊不做事に。則十三輯之又第七輯
 八輯の七冊八冊と又分巻と加え數まで平均廿十六七輯に至るべし。そ九
 輯の約りの初念の已とゆざる故に。回数數も只管百七十回りて筆と絶
 まく欲せ故に本編の一卷一回るも。或一回と釐々二巻不做事も。こま
 去れども今と思へ本傳百七十回りの局と結ぶ尚足らざる。然りて風案の腹
 稿の辟言ハ統ねる緒の如く。是を文不做事と。其緒と解延不似て思ひ
 より。長くするざることを。今と初念と改め。二百八十許回りて大
 圓不做事も。然れば言又の及べり。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十終

○南總里見八犬傳第九輯下帙下編之上画工筆畊刷人目次

出像畫工

柳川重信



補助畫工

溪齋英泉



總卷淨書

谷金川

二十六之卷

澤金次郎

二十七之卷

常盤園

剖刷

二十八之卷

高谷熊五郎

二十九之卷

四十之卷

澤金次郎

○曲亭翁精編本房藏板畧目 江戸書林 文溪堂

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之下

五卷結局大團圓
巻引續記出

